

---

Nest of Dragon ~ 気高き契約 ~

神酒 羽乃魅

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

Nest of Dragon ～気高き契約～

### 【Nコード】

N2282BA

### 【作者名】

神酒 羽乃魅

### 【あらすじ】

主人公である 桜夢 美智霞 は、生まれる時に母をなくし音を失った。小学校で親友ができ、中学校でクラスが分かれ、つらい日々をおくっていた。しかし、そんな美智霞がある日、ドラゴンに出会い、ある契約をすることになるのだが・・・。その後、美智霞の日常は一変する！  
契約内容と違う報酬までもらっている事に気づき、ある重大な秘密を知ることになる。



## き 最悪な目覚め

目が覚めるとそこは、ただただ真っ白な部屋だった

私が身に纏っているものも、シミが目立ちそうないものだった。

しかし私の横には一つ・・・、いや一人白くない人が私を見つめていた

「お父さん？」

驚いたように父は私の手を握った。

「うっうっうっ！よかった。本当に良かった！死ななくて本当に・・・！！！」

「！！」

いやそりゃ驚くよ！だって何がなんだか分からないのにいきなり親に死ななくて良かったって言われたら。

「うっ！」

頭が痛い・・・。ズキズキする・・・。

冷静に考えないと・・・。思い出せること全部とりあえず・・・。  
・・・。。？

まって、今私父さんとしやべってた・・・。

父さんの声が聞こえた。生まれて初めて……。

確か私、耳が聞こえなかったはずじゃ……。

いや、そうじゃなくてまず、

自分の事思い出して、そこから整理しないと頭が追いつかない・

。

私の名前は桜夢 美智霞、13歳。もちろん女。

女じゃなかったらむしろ気持ち悪い。

それで今年中学校に入学したばかり。

あと、えーっと……。

「美智霞??」

父は心配そうに私の顔を覗き込む。

「なんで?私この通りぴんぴんして……うっ!ぐっゴホッ!ゲホ  
ゲホッ」

腕を振り回した瞬間、

私の背中に骨盤から首まで背骨を駆け上るような激痛が走った。

すると白衣を身にまとった人が私の背中を察すってきた。

とても申し訳なさそうな、まるで私を哀れむような視線……。  
察しがついた。

ああ、なるほど……。納得だよ。

でも頭の中でいくら落ち着かせようとしても、そんな冷静に構え

ていられなかった。

恐怖。生まれて初めてだ。こんな恐ろしい恐怖は……。

いじめられても、けなされても

今なら全然怖いなんて思わないだろう。

「……………」

医者は黙ったまま私の背中をさすり続ける。

「なつなに？何なの先生。私ちゃんと受け止めるからさ。」  
患者に気を遣わせるなんてとんだ医者だよ。

しかし医者は私に背を向け、父さんに一言

「ついて来ててください。」と。

部屋で一人になり、すこしほっとする。

ほっとするあまり真っ白なシーツに水が零れた。

何でだろう???一人になると、こらえてた物が溢れてしまう……。  
こんな姿、父さんに見せれないよ。

落ち着いてすこし頭を整理する。

私のもやるべきことがある。

まず、昨日の出来事を思い出すんだ。

そうすればきっと、私のみにながら起きているのかも分かるはずだ。

しかし私はそのまま眠りについてしまった……。

## 貳 初めての親友

私は小学校のときから、ほとんど一人ぼっちだった。

何か集団で行動するときは、できるだけ嫌そうな顔をする子達を避けて

グループに加わった。

小学校六年生のときに初めて、やっと分かり合える友達に出会えた。

彼女の名前は 神前 亜莉那。

親友になった。彼女は筆談で私と会話してくれた。耳が聞こえない私にとっても親切にしてくれた。

それから1年間、二人で多くの行事や物事を一緒に楽しんだ。

楽しいほど時間の流れは早く、ついに卒業式を向かえ……。

私はそわそわしながら、ポケットからシャープペンとピンクのメモ紙を取り出し

亜莉那に見せる。

『中学校入って、もしも違うクラスになったらどうする??』

『どうするって、美智霞ってば心配しすぎだよ!』

親友が笑っている。

私はいたって真剣なのだが……。

『だってクラス10個もあるんだよ？それじゃあさびしいよ』

『大丈夫だって！学校が違うわけでもないんだし、ほら！部活と  
か同じとこ入れば

いつでもあえるでしょ？』

親友は私にほっとさせるように微笑み、シャーペンとメモ帳を渡  
してくる。

すこし不安は残っていたけど、親友の顔を見て落ち着くことがで  
きた。

私は満面の笑みで親友のほうを向き、大きく頷いた。

彼女だけを信じて……。

参 裏切りは突然に・・・。

中学校のチャイムの音が鳴る。

私は1 - 2で小説を読んでいる。

彼女・・・私の親友だった人は1 - 9で友達と騒いでいる。

なぜこんな事になったのだろうか・・・。

そもそも亜莉那が同じ部活に入ってくれなかったのが始まりだ。

私と一緒に行こうといていた陸上部に入らず、新しくできた友達と

テニス部に入った。

その上、最初は休み時間、一日に3回くらいは私の教室に遊びに来てくれたり、

私が彼女の教室に遊びに来るのを彼女が待っていてくれた。

なのに近頃は一週間に一回あるかないか・・・。

私が行ってもドアの外なぞまったく気にせず仲の良い友達と騒ぎまわっている。

少しの間だけだと思っていた。  
彼女が私を裏切るはずがない。

しかしそれは私の誤解だったようだ……。

今日久しぶりに教室移動のときすれ違い目が合った。気分が晴れたが、それもつかの間。

ニコッと笑おうとしたが、彼女はすぐに目をそらし、楽しみに友達と喋っていた。彼女の長いポニーテールが私に背を向けた。

しかしそんな学校生活の中唯一幸せだったのは、梓縞しじま 亜貴斗あきと 彼が私に笑いかけてくれることだった。

彼はみんなに優しく、私にやさしい笑みを浮かべてくれる。

小学校の4年生のころからずっと、彼の笑みを見るのが大好きだった。

クラスの男子は私に声が聞こえないことをいい事に、わたしに意地悪ばかりしているっぽい。

ホント誰かとは大違いだわ。

チャイムの鐘の音を聞き私は一人で部室へ向かう。

早めに行かないと、人がいっぱい来ると嫌なことしか起こらない。

校舎を懸命に走りぬけ、部室のドアを思いつきり開閉する。

フウっと一息入れ、急いで着替え一人で部活を始める。

今の陸上部は先輩がほとんどサボっているため

別に誰が何しようが怒る人も居ない。  
顧問も居ない

ほとんど真面目にやっているのは私だけだが、  
それでも人が来るんじゃないかと心配になる。

走るのは気持ち良い。  
何もかも、走っている間だけは忘れられる。

唯一不満があるとすれば  
走るときに風を掻き分ける音。それが一度で良いから聞いてみた  
いと思う。

二、三時間ほどしてすべてのメニューをこなし  
帰りの用意をする。

荷物を背負い一人校門に向かう。

しかし私はそこで見たくないものを見ることになる。

( あれは、亜貴斗くんと…… )

もう一人女の人が見える。男の人だったら気にしなかったのに。

ちょうど彼らはプールの裏で楽しげに会話していた。

女の人の方は……竹内たけうち 凜りんね瀬ちゃん??

彼女は中学に入ってから私の代わりに親友の横を歩くようになったこのひとりだ。

私とは何もかも正反対で何でもずばずば言える。

でもなんで彼女と亜貴斗くんが??

こっそり覗いてもばれないだろう。

そう思い影で彼らの様子を伺う。

亜貴斗くんが笑っている。

女子とはあんまり話さないのに……。

あ！みたくないもの見てしまった。

次の瞬間、私はその場から逃げ出した。

「あうう！うあああああー！ー！」

私が今走れる精一杯の力でとにかく走った。走った。

何もかも忘れるために。

しかし、忘れようとすればするほど

私の頭にあの映像がよみがえる……。

彼女、凜禰と亜貴斗は仲良さげに腕を組んだのだ。

彼らは私に気づいたのだろうか。

もう嫌だ。

こんな報われない人生。ひとつくらいいい事あってもイイじゃないか。

横断歩道を急いでわたり、家へ直行する。

かばんに手を突っ込み、カードキーを出す。

父は仕事だ。

母はどうして私なんか生んだのだろう。

生まなかったらきつと、母も父も生きてたまま楽しくやっていけただろうに。

私も意識を持たずにいられただろうに……。

ドアを開けて二階へ駆け上がり、自分のベッドに倒れこむ。

うつうつ！なんで？何で私ばかり……。

その日私は夕飯も食べずに寝てしまったという。

#### 四 契約者Dragon

暗い……。気持ちの悪い夢。

何にもない。

どうせ夢ならもっと楽しい夢が見たかった。

いや、夢なんか見ずに何も考えずに眠りたかった。

は。よりによってなんでこんな日にこんな夢みるのよ……。

「おい。」

うん？今何か聞こえたような……。

でも私声聞こえないし……。ってこれ夢だし関係ないか。

「おいってばー」

何よ、こいつ。うるさいな。

きいこえてるっつーの。

「はいはい、なあ……。。」

「に」と続けるはずがそこでとまってしまった。

息も声も出ないくらいに驚いたから。

声の呼ぶほうには、見ず知らずの生物がいたのだ。

それだけならともかく、そいつからは物凄い気迫が感じられた。  
震え上がった。

「ぷふっ！初々しいなあ！まあ初めは皆そうだから、  
おめーが珍しいわけでもねーけどな。」

驚き怯えて、しっかりと見ていなかったけど  
よく見るとまったく見覚えがないわけでもない。

それは小説や絵でお目にかかったものだ。

「ドラゴン？」

私の小さすぎる声はやつには届かずに、心の中で反響した。

「……。」

「……。」

「……。」

「……ってなんかしゃべれよ！」

「ふっ。なかなか生意気だな貴様。腰抜かして何もしゃべって  
いなかったのはお前だろ。」

なかなかムカつくドラゴンだ……。

「……で？」

「困ってたんだ。ちょっと協力してくれねーか。いそいでっから早めに決めてくれ。」

別にただでやれとはいわねーよ。契約ってやつだ！」

なぜかドラゴンは自慢げに語る……。なぞだ……。

なんにせよ怪しい……。

怪しすぎる。

夢とはいえ面倒事にあうのは本当にゴメンだ。

「すみません。母に知らない人の話し聞いちゃいけないって……

」。

母はいないけどここはやっぱり決まり文句。

相手が知ってるはずないし何いったって別にいいーだろ

しかし奴は小ばかにした顔と同時に哀れむような顔で私を見る。

「そこは知らない人についてっちゃいけません！だろ。決まり文句は。」

知らない人に道尋ねられてお前は逃げるのかよ！」

なかなか鋭い突っ込みありがとう！

って別に待ってたわけじゃないよ？この突っ込み。

「それにお前、母なんかとっくの昔に亡くなってるだろが。」

お前が生まれたときにな。」

「!?!」

知ってるはずない。はずないのに……!!

「うそ?なんで!えっなんで??」

「なんでって。そんな驚くこたあねえだろ。お前らとは別の生命体。」

どんな能力持ってたっておかしくねーだろ。

それにお前の夢の中に入るには、必要な情報だしな」

低く太い声が暗闇に響き渡る。

ん?夢の中に入る??どういうこと??頭が破裂しそう……。

ていうか、自分で別の生命体って言っちゃてる。やっぱりそうなんだ。

って当たり前か。

「そうじゃなくて、契約のほうに話し戻して!

契約の内容聞かないと答えようがないよ。」

「ん?ああそうだな。すまん。」

「先に報酬が何か教えてくれる?」

図々しいやつかもしれないがこれは大事。

面倒なことに巻き込まれて報酬がしょぼかったら

最悪だもん。

それに所詮夢。現実になつたとしても

面倒なこと、つまりは魔法とかそっち系の事になって

問題が起こつたらもうあの忌々しい学校に行かなくてすむ。

「お前が一番望むもの、ひとつだけ叶えてやろう。さすがに何でもは無理だが

現実的にありえるものなら叶えてやれるぞ。」

私はひとつピンつときて答える。満面の笑みで。

「じゃあ殺して」「……………」

無表情vs満面の笑み。そのまま暫くたつた頃、しゃべり始めたのは「別の生命体」だった。

「お前、無理すんなよ。俺にはお前が本当に叶えて欲しいことぐらいわかってるんだぞ。」

かなえられるんだぞ?」

「……………」

「つらかっただろう。耳が聞こえねえせえで大変だったんだな。」

お前さえ望むのなら、俺はいつでも叶えてやる。頼みを聞いて

くれたらだが。」

私は黙ったままうつむいた。

思い出したくない過去が涙とともにあふれ出す。

私は表情を変えてピシッと顔を上げた。

「なかなか口上手ね。いいわ。

報酬はそれ・・・私の耳が聞こえるようになることでもいいわ。

でもまだ頼みごとを聞いてないから、契約するかどうかはまだ未決ということだ。」

「おう！俺たちはな、とある事情でお前たちのいる世界にいるんだが、

行動するときには身を置く場所が必要になんだよ。

しかし、どうしてもこの世界に用事があつてな・・・。」

話が長いのは嫌いだ。私は腕を組み話をさえぎる。

「前置きはいいから！！単刀直入にいつてくれる？」

「まったくせつかちだな。仕方ねえ。つまりはだな。えっと、その。」

お前の背中に住まわしてほしいんだ。最初は副作用とか出たり、すぐに報酬の結果が現れなかったりするが、お前なら大丈夫だ

らう。」

「・・・それだけ？」

あっけにとられた顔で聞き返す。

「たまに俺の用事に付き合ってもらうことになるが、おお。それだけだ。」

「いいわよ？」

「よっしゃ！契約成立だな。もう寝てもいいぜ。」

奴はスーツと暗闇の中に消えていった。

そういえばドラゴン一匹一匹にも名前ぐらいあるよな……。

あたし名前聞いてねーや！

ん？あ、そういえばこれ夢だったっけ。

夢だと気づいたが、いつになったらこの暗闇の中から抜け出しお  
きれるんだろっ……。

そんなことを考え、しばらくして私は深い眠りについた。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n2282ba/>

---

Nest of Dragon ~気高き契約~

2012年1月6日10時50分発行